

山本 覚 馬

—京都の近代化を導いた会津人—

河野 仁昭

(元同志社史資料室長)

●初対面の新島襄に

京都府顧問の山本覚馬に新島襄が初めて会ったのは、明治8（1875）年4月上旬であった。新島は当時、当面の任地である大阪の川口居留地にいた。初めて京都見物に来て山本に会ったのである。

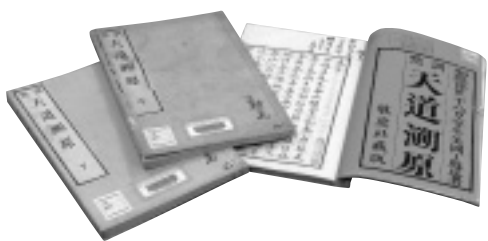
京都府権大参事榎村正直の紹介だとされているが、参議木戸孝允（きよひこ）の示唆があったかも知れない。かつて岩倉使節団の副使の一人で面識があった木戸に、新島は

学校設立の問題で大阪で接していた。

また、新島は川口居留地でM・L・ゴードン宣教師宅に寄宿していたのだったが、たま



晩年の山本 覚馬
(同志社史資料センター蔵)



W.A.P.マーティン著『天道溯原』(1869年版)
1854年、宣教師マーティンによって中国語でかかれた教理書。訓点本が明治初期に刊行され、キリスト教普及に大きな役割を果たした。
(同志社史資料センター蔵)

ン夫妻は京都に滞在しており、表敬訪問だったろうが山本を訪ねて『天道溯原』を贈っていた。だからゴードンが面会をすすめた可能性はある。

この書物は、キリスト教証拠論に基づいて、中国語で平易に書かれた布教書（W・A・P・マーティン著。1854年刊）で、中国の知識人に広く読まれて版を重ねていた。

山本は訪ねてきた新島に言った。「その本はわたしにとっても有益だった。キ

リスト教についての多くの疑問を氷解し、長年わたしを苦しめてきた難問をも解いてくれたのだ。（中略）法律は悪しき思いを防ぐことができぬ。しかしわたしにも明け方の光がさしてきた。今やわたしには、以前には全くわからないでいた道が見える」（『新島襄全集』第10巻）

全旨になっていた山本は、彼に政治や経済を学びに来ていた青年の一人に音読してもらったのだろう。

この山本のことは新島の緊張や警戒心を解き、二人の距離を一挙に縮めたに違いないと思われる。

大阪に帰った新島は、アモスト大学の恩人J・H・シーリーあてに、初めての関西旅行について手紙を書いた。その中で、一人の有名な人物から、京都にカレッジを創るよう懇ろにすすめられた。もし公然とキリスト教を教えることができるなら、そのすすめに従ってもよいと思っている、と告げているのである（『新島襄全集』第6巻）。山本が初対面の新島に何を語ったかがうかがえる。『天道溯原』に関する話から察して、キリスト教教育について、約束とまではい

かなくても、何らかの希望を語るといったことは恐らくあったであろう。

新島はそれまで、古い都京都に学校を創ろうなどとは思ってもみないことだった。彼がその一員であるアメリカン・ボードの在日宣教師団は、あるいは当然ながら、日本人伝道師の養成しか考えていなかった。それは神戸でできることであった。それに対して新島は、近代科学をも教える学校にしなければ優秀な若者は集まらないであろうし、その学校は日本第二の都市大阪が適地だと考えていた。しかし、彼を積極的に支持する宣教師はいなかった。京都ともなれば論外である。だが、その京都に学校を創るべく、新島は行動を開始したのであった。

●第二の人生を開いた「管見」

山本は文政11（1828）年1月11日、会津藩砲術師範権八の長男として生を享けた。藩命によることだったが23歳（数え年—以下同じ）のとき江戸に出て、蘭学者佐久間象山の門に入った。学んだのは砲術や兵学だったろう。



会津出身の生徒・学生たちとの写真
前列中央が山本覚馬。後列左2人目から新島 襄、新島八重（覚馬の妹）、
松平容大（旧藩主・松平容保の子息）（同志社社史資料センター蔵）

一時帰藩したが、再度江戸へ出て大木衷域に蘭学を学ぶとともに、洋式砲術について象山、勝海舟らの意見を質し、その影響を受けた。

ほぼ3年間江戸で学んだ山本は、帰藩して藩校日新館の教授となり、保守派の反対を押し切って館内に蘭学所を設けた。それだけでなく、洋式の新兵器の導入をめぐる上司と対立し、禁足1年を命じられてなお主張を変えず、ようやく実現の緒につこうとした元治元（1864）年2月、幕府から京都守護職を命じられた藩主松平容保に従って、京都に駐留することになったのである。以後会津へ帰ることはなかった。

この年の7月、大砲隊を率いて禁門の変を戦ったことはよく知られているが、彼が長崎へ赴いたのが事実だとすれば、その後のことであろう（福本武久・高橋哲夫『会津武士』参照）。その目的や期間など詳細は明らかにすべくもないのだが、のちに京都府の技術指導者となるルドルフ・レーマンと知り合うのはこのとき、長崎においてだったらしい。

やがて慶応4（1868）年正月、幕

府軍が大敗北を喫した鳥羽伏見の戦いの際、捕らわれて薩摩屋敷に拘禁された山本は、彼の後半生を決定づけることになる「管見」を口述筆記した。当時すでに眼病で視力をほとんど失っていた彼は、同じ部屋にいた数名の虜囚の中に、17歳の会津藩士野沢鵠一がいたので筆記を頼んだ。その序文の日付は、慶応4年戊辰5月となっている。

内容に立ち入る紙幅はないが（拙編『山本覚馬・新島八重兄妹の生涯』参照）、日本をめぐる列強の動向を略述し、「国家騒擾ノ際ニ乗ズレバ変制モ仕易キモノニテ」と序文に記してから、わが国が早急に取り組むべき課題22項目をあげ、それぞれ解決策までも簡潔に述べているのである。項目は、政治、経済、法律、軍備、産業、通商、教育、その他に及んでいる。さらに驚くべきことは、彼が海外事情にまで通じていることである。

「管見」の中の「建国術」の項に、プロイス（ドイツ）人レーマン、和蘭人ハルトマ、ポートーイン、イギリス人ゴロールらにかつて聞いたという話を手短かに紹介している。安政の仮条約締結（18

58年）により、横浜、函館、長崎が開港したから、自由にとはいかないまでも、外国人に接することは可能であった。それにしても、武士であった山本が、農業、工業、商業に関する知識までも得ようとしていた事実は、極めて興味ぶかい。その該博な知識に基づく「管見」が、具眼の士の注意を引かなかったはずがない。

● 京都の復興・近代化の智囊

山本が拘禁を解かれて兵部省預かりの身になったのは、明治2（1869）年夏であったと思われる。その山本に、京都の勸業施策立案の協力をいち早く求めたのは、大参事の河田左久馬であった。河田は「管見」を見て山本の存在を知ったに違いないだろう。

「管見」は薩摩藩主に差し出されたであろうが、写本が作られていることから察して（同志社大学図書館にもその一通が保存されている）、京都府政の要人のあいだでも評判になっていたと考えられる。河田は東京遷都後の京都の衰微と市

民の動揺対策として、まず産業復興策を立案中であった。その「施策大綱」を右大臣三条実美に上申したのは、明治3年7月であった（京都市編『京都の歴史』第8巻参照）。

これに先だつ同年3月、京都府は山本覚馬「登庸伺」を太政官に提出しており、翌月その許可を得ている。「施策大綱」が「山本覚馬の意見に多分に影響されている」（同右『京都の歴史』）としても不思議はない。山本は顧問格であった。

河田の在任期間は短く、後を継いだ横村正直は、山本や明石博高らのアイデアをフルに生かした。技術面の指導者として、ルドルフ・レーマン、カール・レーマン兄弟を雇い入れたのも、山本の勧めによることである。

復興・近代化の柱の一つに教育制度があった。明治5年頃までには、府中学、英学校、ドイツ学校、フランス学校、新英学校女紅場（女学校）などを、外国人教員を雇用して開設した。ところが、明治7年に政府が外国人数員の人件費補助を打ち切ったために、存続はほとんど不可能の状態に陥ったのである。そこへ京

都見物に現れたのが新島襄であつた。山本は新島を動かしたのだ。

山本と新島を結社人とする同志社英学校は、京都府にとつては教育近代化の一環にほかならなかつた。しかも、府が財政負担を要しない私立であつた。

●不可欠の人物

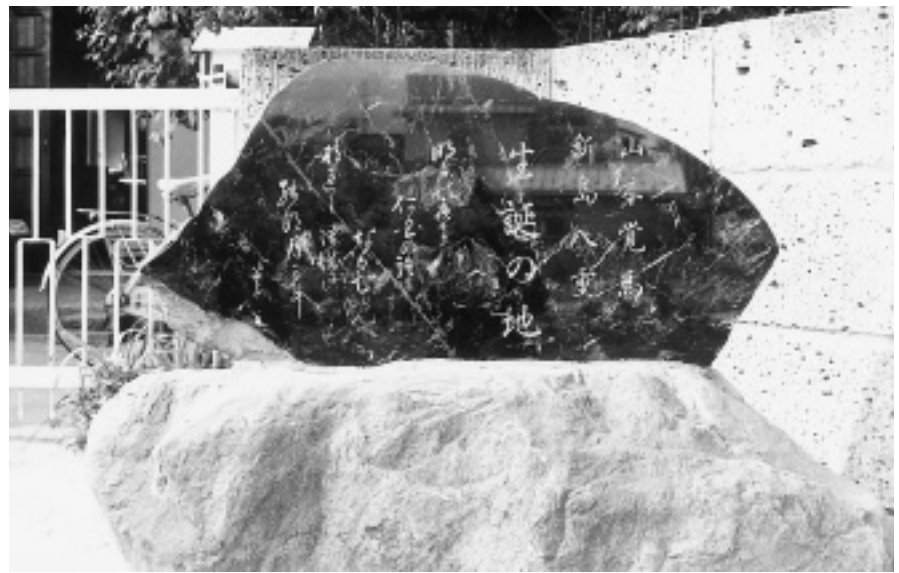
明治9（1876）年9月、同志社英学校最初の専用校舎2棟と食堂1棟が竣工し、その献堂式が営まれた。新島はその模様をアメリカの恩人A・ハーディー夫妻に伝える手紙の中で、山本覚馬にふれている。

「山本氏は肉体こそ弱っており、体の自由もききませんが、私たちの中の最もすぐれた思索家の一人と見なされています。京都に宣教師団が存在できるのはおもに山本氏のおかげなのです。（中略）この冬の暗い試練の時に、山本氏は私たちのために立ち上がり、知事を説得するために最善をつくしました」（『新島襄全集』第10巻）

京都の近代化の一環とはいうものの、

キリスト教主義同志社英学校の創設と維持は、山本にとつて茨の道であつたろう。その同志社との関係によることと思われるが、明治10年12月、山本はひとこととの理由の説明もなく、横村によつて府庁を解雇された。横村はその前年に第2代知事に就任していた。

だが、明治12年に京都府議会が開設され、その議員に当選した山本は初代議長に選ばれた。かつて自宅の座敷で政治や経済を教えた青年たちが、いまや京都の新進実業家、政治家に成長していたのである。



山本覚馬・新島八重生誕の地碑
1989年に建立された生誕の地碑（会津若松市米代2丁目）。「生誕の地」の左側に、「明日の夜は何国の誰かながむらん／なれし御城に残す月かげ」と、八重自筆の和歌が刻まれている。

木戸孝允の懐刀といわれた横村は、地方行政家としても確かに敏腕であつた。

しかし、独断専行型の古いタイプで、地方税の追加徴令布達など重要議案においてさえ議會を無視した。明治14年1月、彼はついに辞職に追い込まれた。

高知県令であつた北垣国道が、第3代府知事に着任したのは、その翌月であつた。彼は民意を重視する行政家として定評があり、横村を辞職に追い込んだ議員たちの支持を得た。

全旨に加えて自力では立つことができず、衰弱も進んでいた山本は、明治13年5月に議長を辞任していた。しかし、依然として影響力を持っていたし、北垣も山本の意見を聞くことを怠らなかつた。そのことが新島襄との好ましい関係を生むことにもなった。

その山本が、設立後まもない商工會議所会長に就任するのは、明治18年5月である。北垣も関与したであろうが、副会長浜岡光哲、理事大沢善助、中村栄助といった顔ぶれから察して（『京都の歴史』第8巻参照）、こうした人たちの懇請によることだと思われる。山本を師と仰ぐ

人たちが多数いたのである。

会長に就任した月の17日、山本は時栄夫人（再婚）とともに、第2公会で洗礼を受けている。北垣府政のもとでは問題になることではなかつた。大沢も中村もキリスト教徒であつた。

北垣も関与しただろうといま書いたのは、この年の6月2日に琵琶湖疏水工事の起工式が行なわれているからである。北垣が政治生命をかけたこの大事業は、金と人と技術の総動員を必要とした。若手政財界人に影響力を持つ山本は、北垣にとって欠くべからざる人物だったに違いないのである。

だが、山本の健康は商工會議所会長の職に長くとどまることを許さず、浜岡光哲に後事を託して、明治18年末をもって辞任した。病を養いながら平穏な余生を過ごそうと願っていたであろう。だが、明治23（1890）年1月23日、新島襄を失つたのである。

明治12年に第1回卒業生を送り出してようやく10年を経たばかりで、同志社人はまだ若かつた。加えて「教育勅語」の発布（明治23年）以来、キリスト教学校

への国の圧力が強まりつつあつた。

山本は臨時総長として、新島の後継者を選ばねばならなかつた。彼を措いてほかに、その任に耐える人は当時の同志社にはいなかったのだ。

明治25（1892）年3月、小崎弘道第2代社長の誕生を見届け、その年の12月28日、65年の生涯を閉じた。

山本 覚馬（やまもと かくま） 1828.1.11～1892.12.28

会津藩士。1864年、藩主・松平容保に随行して上洛。鳥羽・伏見の戦いで捕えられ、薩摩藩邸に幽閉中に失明。明治維新後、口述筆記した「管見」が認められ京都府顧問、京都府議會初代議長、京都商工會議所会頭などを歴任。

1875年、新島襄とともに同志社英学校を設立。新島亡き後、同志社臨時総長に就任（1890年1月～1892年3月）。